



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	養護実習における学生の学びの要素(fulltext)
Author(s)	齋藤,千景; 竹鼻,ゆかり
Citation	東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 70: 177-183
Issue Date	2018-10-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/150200
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

養護実習における学生の学びの要素

齋藤千景^{*1}・竹鼻ゆかり^{*2}

養護教育分野

(2018年6月29日受理)

SAITO, C. and TAKEHANA, Y.: Student learning factors in *Yogo* teaching practice. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 70: 177-183. (2018) ISSN 1880-4349

Abstract

[Background] *Yogo* students learning in hands-on junior high and elementary school environments is necessary for the curriculum at *Yogo* teacher training universities in Japan. Although most studies targeting students in *Yogo* teaching practice have examined how each universities improves their method to improve the achievement degree for their purposes of *Yogo* teaching practice, few surveys have particularly addressed students' learning factors.

[Purposes] The purpose of this study was to extract students' learning factors in *Yogo* teaching practice.

[Methods] We conducted semi-structured interviews of five students of a *Yogo* teacher training universities. All had experienced *Yogo* teaching practice. Based on the word-for-word record we made, we extracted points related to our study purpose and encoded them. Furthermore, we categorized them, organizing similar codes.

[Results] Students' learning factors were categorized into "Expanded views of children and health," "Understanding duties and roles of a *Yogo* teacher," "Deepened views of teachers and instruction," "Self-understanding and discovering problems," and "Attitudes as a member of society." Students acquired the "expanded views of children and health" and "understanding duties and roles of a *Yogo* teacher," which are the purposes of their training, through their *Yogo* teaching practice. Additionally, through the practice, they gained a "deepened view of teachers and instruction," suggesting that we can consider *Yogo* teaching practice from a broader perspective including instruction from other teachers as well as *Yogo* teachers. Furthermore, they acquired guidelines for their future life in universities and for selecting a career through the learning of "attitude as a member of society" and "self-understanding and discovering problems."

[Conclusion] Our students did not only clarify their practice purposes through their *Yogo* teaching practice experiences. They also deepened their self-understanding and learned attitudes as a member of society.

Keywords: *Yogo* teaching practice, students, learning factor

Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

* 十文字学園女子大学 人間生活学部 (352-8510 新座市菅沢2-1-28)
* 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

要旨： 背景；養護教諭になるためには学校で養護実習を行う必要がある。養護実習を経験した学生を対象とした研究は、大学が自校の養護実習の目標に対して到達度を高めるための工夫を検討したものが多く、学生の学びの要素に着目した調査は少ない。

目的；本研究の目的は、養護実習における学生の学びの要素を抽出することである。

方法；養護教諭養成大学の養護実習を体験した学生5名を対象に、半構造化面接によるインタビューによる調査を実施した。逐語録を作成し、研究目的に関連する部分を抜き出し、コード化を行った。その後、類似のコードをまとめてカテゴリー化を行った。

結果；養護実習における学生の学びの要素は【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】、【教員観・指導観の深まり】、【自己理解と課題発見】、【社会人としての態度】であった。学生は養護実習を通じて、実習の目標である【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】を修得していた。さらに実習を通じて【教員観・指導観の深まり】を得ており、指導教諭以外の教員からの指導も含めたより広い観点で養護実習を捉える可能性が示された。さらに【社会人としての態度】、【自己理解と課題発見】の学びを通して、今後の大学生活や進路選択への指針を得ていた。

結論；学生は養護実習で実習目標の修得のみならず、自己理解を深め、社会人としての態度を学んでいた。

1. 緒言

養護実習は、教諭免許取得における教育実習に相当する実習で、教育職員免許法により一種免許状には5単位、二種免許状には4単位を取得することが義務付けられている¹⁾。しかしながら、養護実習における目標や内容は養護教諭養成大学で統一したものは示されていない。一方、子どもをとりまく環境は多様化、複雑化しており、養護教諭に求められる専門性にも変化が生じており、従来の養護実習を踏襲するだけでは、新任の養護教諭の専門性の担保に課題が生じている。そこで、養護実習を時代のニーズにあったものとして充実発展させるためには、学生が養護実習で何を体験し、学んでいるかを調べる必要がある。

養護実習は大学で学んだ基礎や理論を実際の教育実践場面において検証して、発展させていく機会と位置づけられる²⁾。しかしながら、養護実習に関する規定が定められている教育職員免許法施行規則には、実習の校種や時期、内容、方法についての具体的な記載はみられず、養護教諭養成大学で統一した実習目標や内容は示されていない。一方、平成29年に教員免許法及び同施行規則に基づき全大学の教職課程で共通に履修すべき資質能力を示した教職課程コアカリキュラム³⁾が作成された。しかしながら、これには、教育実習のコアカリキュラムは示されているが、養護実習のコアカリキュラムは示されていない。そのため、各大学は、養護実習の内容に関する規定がないなか、創意工夫の元に実習を行っているが、学生の到達目標は一様ではなく養護実習における学生の学びを担保する必要がある。

一方、子どもをとりまく環境は多様化、複雑化して

おり、養護教諭に求められる専門性にも変化が生じている。現在の子どもの健康には、肥満・痩身、生活習慣の乱れ、メンタルヘルスの問題、アレルギー疾患の増加、性に関する問題など、多様な課題が生じている。また、身体的な不調の背景には、いじめ、児童虐待、不登校、貧困などの問題が関わっていることもある⁴⁾。さらに学校においても、子どもを取り巻く状況の変化や多様化・複雑化した課題に向き合うため、教職員に加え、多様な背景を有する人材が各々の専門性に応じて学校運営に参画することにより、学校の教育力・組織力をより効果的に高めていくことが求められている⁵⁾。つまり養護教諭は子どもの健康課題を的確に早期発見し、課題に応じた支援を行うことのみならず、全ての子どもが生涯にわたって健康な生活を送るために必要な力を育成するための取組を、他の教職員と連携しつつ日常的に行うことが求められる⁶⁾。このように、養護教諭に求められる専門性にも変化が生じており、養護実習を時代のニーズにあった内容にする必要に迫られている。

そこで、養護実習に関する学生を対象とした調査に着目すると、実習内容の経験頻度⁷⁾や養護実習の目標達成度及び達成度に影響する要因⁷⁾⁸⁾を調べたものがある。しかしこれらは、各大学が自校の養護実習の目標に対して到達度を高めるための工夫を検討したものがほとんどで、学生の学びの要素そのものに着目した調査は少ない。養護教諭養成の核となる科目である養護概説は養護教諭免許取得科目とされてから20年余りとなり、この間、職務内容や方法論のみならず、養護の基本原則に基づいた理論や哲学について学ぶことが重要視されてきた⁹⁾。このように養護観を重視した教育が行われるなか、実習で実際に子どもと関わり、養

護実践を体験することで、学生は実習の経験を通じて理論と現実の統合を経て、価値観の広がりを得ていることが予測される。さらに教育環境の変化や子どもの健康課題の変化に伴い⁶⁾、学生が教育現場で学んでいる要素にも変化が生じている可能性もある。よって、養護実習を時代のニーズにあったものとして充実発展させるためには、あらためて学生が養護実習で何を体験し、学んでいるかを調べる必要がある。

そこで、本研究の目的は、養護実習を終えた学生に対してインタビューをすることにより、学生は実習で何を学び、どのように成長しているのかを、彼らの体験の語りから明らかにすることである。

2. 方法

2. 1 対象

養護教諭養成大学3校の養護実習を体験した学生（インタビュー時には卒業していた学生も含む）5名である。

2. 2 調査方法

2014年2月～4月に、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。インタビューは大学毎に3回実施し、時間は1回につき50分～65分であった。調査内容はインタビューガイドに基づき、実習状況（実習期間・実習校種）、実習内容、養護実習の目標と達成度、実習を通しての自己の変化や学び、価値観の変化であった。

2. 3 分析方法

許可を得てインタビューを録音し、逐語録を作成した。その後、研究目的に関連する部分を抜き出し、文脈を損なわないように言葉を補足し、コード化を行った。その後、類似のコードをまとめてサブカテゴリーとし、さらに類似の内容によりカテゴリー化を行った。カテゴリーの内容については、整合性を高めるために研究者4名によって確認し、修正を重ねた。

2. 4 倫理的配慮

調査に当たっては研究者の所属機関における研究倫理審査委員会の承認【承認番号2013-09】を得た。対象者には口頭により研究の目的、方法、研究の参加ならびに中断における個人の自由意志の尊重、プライバシーの保持について説明し、同意を得たうえで実施した。

3. 結果

対象者の属性と実習状況を表1に示す。

養護実習における学びの要素として5つのカテゴリーが抽出された。以下カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [], コード例を「 」で示す。

養護実習における学生の学びの要素は表2に示すように【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】、【教員観・指導観の深まり】、【自己理解と課題発見】、【社会人としての態度】であった。

【子ども観・健康観の広がり】は[できない存在からできる存在の着眼点の変化]、[子どものエネルギーの強さ・可能性の大きさ]、[子どもの発達・成長の個

表1 対象者の属性と実習状況

	A	B	C	D	E
養成大学	教育系	教育系	学際系	学際系	看護系
学年	4年	4年	4年	4年	4年*
実習回数	2回	2回	1回	1回	1回
実習学年	3年生後期	3年生後期	4年生前期	4年生前期	4年生後期
実習期間	3週間	3週間	4週間	4週間	4週間
1回目 実習校種	高等学校	中学校	小学校	小学校	中学校
実習校の規模	約1000人	約480人	約750人	約240人	約280人
養護教諭の複数配置の有無	有	無	無	無	無
実習学年	4年生前期	4年生前期			
実習期間	3週間	3週間			
2回目 実習校種	小学校	小学校			
実習校の規模	約400人	約680人			
養護教諭の複数配置の有無	無	無			

*インタビュー実施時には卒業していた

表2 養護実習における学生の学びの要素

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
子ども観・健康観の広がり	できない存在からできる存在の着眼点の変化	子どもの問題点ばかり勉強していたが、実際の子どもはできることがたくさんあった。
	子どものエネルギーの強さ・可能性の大きさ	子どもの学ぶ姿勢の強さとパワーを感じた。
	子どもの発達・成長の個人差	子どもの発達や成長には個人差があることを実感した。子どもは常に成長していると感じた。
	場面による子どもの変化	保健室でみる子どもと教室でみる子どもの様子はかならずしも一緒ではなかった。
	健康と生活や地域との関連	家庭の状況は子どもの健康問題と深くかかわっていた。地域によっても子どもの問題は違うと感じた。
養護教諭の職務・役割の理解	養護教諭の教育的立場の理解	養護教諭は指導的立場であり教員であることを実感した。
	協働・連携の必要性和養護教諭の役割	養護教諭がどのように動いているかをみて、組織の中の養護教諭の役割がわかった。養護教諭の職務を遂行する上で連携の必要性を感じた。
	保健室から学校全体への養護教諭の職務の広がり	保健室から学校の養護教諭へと養護教諭のイメージが広がった。養護教諭が学校内を動き回っていて、養護教諭の仕事に対する視野が広がった。
	子どもに対する多様な対応方法の理解	処置の方法も一つではなく、子どもによって違うこと、対応も一つの方法だけでないことを学んだ。
	子どもの発達段階を踏まえた対応の気付き	学校種によって子どもへの対応が違うことがわかった。
教員観・指導観の深まり	養護教諭の職務に対する認知度の低さ	他の実習生は養護教諭の職務について知らないことがショックだった。
	教員の責任とやりがい	教員はたいへんな仕事だけど楽しいことを実感した。
	思考力を重視した指導	思考の広がりを与えるような指導力が必要であることに気がついた。
	多様な指導方法	子どもへの関わり方は一つではないこと、対応は一つでなくて良いことを知った。
	教え・教えられる存在	教えることだけではなく、子どもから教えられることが多いことを知った。
自己理解と課題発見	様々な教員観の存在	様々な教員観がある、様々な教員がいることがわかった。
	養護教諭になるための自己の強みと課題の発見	養護教諭にむいている点もわかったし、自分の課題もわかった。自分が苦手な点や欠点があった。
	やり遂げたことによる達成感と自信	つらかったことを乗り越えたことで自信がついた。実習をやり遂げて達成感を得た。自己の成長を感じることができた。
社会人としての態度	養護教諭への志向性の強化	実習を通して、養護教諭になりたい気持ちが強くなった。
	コミュニケーションの重要性	苦手な人とも根気よく接することが大切であることがわかった。コミュニケーションがとれていると働きやすくなることを実感した。
	コミュニケーションスキルの習得	他の先生への報告の仕方・タイミングがわかった。人間関係をうまく行うスキルが身についた。わからないことを聞く必要性がわかり、質問するタイミングや勇気がみについた。文章の書き方がはやく、うまくなった。
	話す度胸とスキルの習得	人前にでる度胸がついた。先生や生徒への話し方がうまくなった。根拠を示してから話す癖がついた。
	やるべきことの整理と優先順位	やるべきことの整理や順序の決め方がわかった。仕事の整理の仕方を先生の仕事をみても学んだ。

人差], [場面による子どもの変化], [健康と生活や地域との関連] から構成された。学生は子どもとの関わりの中で, 「子どもの学ぶ姿勢の強さとパワー」や「子どもの発達や成長には個人差があり, 子どもは常に成長していること」を学ぶと共に, 「子どもの問題点ばかり勉強していたが, 実際の子どもはできることがたくさんある」と子どもを見る際の着眼点が変わっていた。さらに「保健室でみる子どもと教室でみる子どもの様子はかならずしも一緒ではない」など, 子どもは

場面によって見せる姿の違うことを学んでいた。また, 「家庭の状況は子どもの健康問題と深くかかわっている」, 「地域によっても子どもの問題は違う」ことを感じ, 健康は生活と密接に関連していることを学んでいた。

【養護教諭の職務・役割の理解】は [養護教諭の教育的立場の理解], [協働・連携の必要性和養護教諭の役割], [保健室から学校全体への養護教諭の職務の広がり], [子どもに対する多様な対応方法の理解], [子

どもの発達段階を踏まえた対応の気付き], [養護教諭の職務に対する認知度の低さ] から構成された。学生は「養護教諭は指導的立場であり教員であることを実感した」, 「養護教諭の職務を遂行する上で連携の必要性を感じた」, 「保健室から学校の養護教諭へと養護教諭のイメージが広がった」など学校組織の中で養護教諭が果たす役割を学んでいた。さらに「処置の方法も一つではなく, 子どもによって違う。対応も一つの方法だけでないこと」「学校種によって子どもへの対応が違う」など, 養護教諭は子どもに対して, 発達段階に応じた, 個々に応じた対応をしていることを学んでいた。一方, 「他の実習生は養護教諭の職務について知らない」場面に遭遇し, 養護教諭の職務が理解されていない現状も感じていた。

【教員観・指導観の深まり】は「教員の責任とやりがい」, 「思考力を重視した指導」, 「多様な指導方法」, 「教え・教えられる存在」, 「様々な教員観の存在」で構成された。学生は実習全体を通じて「教員はたいへんな仕事だけど楽しいこと」を実感していた。また, 指導は「思考の広がりを与えるような指導力が必要であること」, 「子どもへの関わり方は一つではない。対応は一つでなくて良い」ことに気がつき, 教員は「教えることだけではなく, 子どもから教えられることが多い」ことを学んでいた。

【自己理解と課題発見】は「養護教諭になるための自己の強みと課題の発見」, 「やり遂げたことによる達成感と自信」, 「養護教諭への志向性の強化」から構成された。学生は自身の「養護教諭にむいている点や苦手な点」を学んでいた。一方で実習をやり遂げたことで, 「つらかったことを乗り越えたことでの自信」や「自己の成長や達成感」を得ていた。そして, それらを通じて「養護教諭になりたい気持ちが強くなった」など養護教諭への志向性が強くなっていった。

【社会人としての態度】は「コミュニケーションの重要性」, 「コミュニケーションスキルの習得」, 「話す度胸とスキルの習得」, 「やるべきことの整理と優先順位」から構成された。学生は「苦手な人とも根気よく接することが大切であることがわかった。コミュニケーションがとれていると働きやすくなることを実感した」ことで, コミュニケーションの重要性を理解するとともに, 学校現場での体験を通じて「人間関係をうまく行うスキルが身についた。わからないことを聞く必要性がわかり, 質問するタイミングや勇気が身についた」, 「先生や生徒への話し方がうまくなった。根拠を示してから話す癖がついた」などのコミュニケーションスキルを習得していた。さらに「仕事の整理の

仕方を先生の仕事ぶりをみて学んだ」などやるべきことの整理と優先順位を学習していた。

4. 考察

本研究の目的は, 学生の実習体験の語りから, 養護実習における学生の学びの要素を抽出することである。学生は養護実習を通じて, 実習の目標である【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】を修得していた。さらに実習を通じて指導養護教諭以外の教諭との関わりから【教員観・指導観の深まり】を得ていた。さらに【自己理解と課題発見】、【社会人としての態度】の学びを通して, 進路選択への指針を得ていた。

平成29年に教員免許法及び同施行規則に基づき, 全大学の教職課程で共通に履修すべき資質能力を示した教職課程コアカリキュラム(以下2017コアカリとする)³⁾が作成された。これには, 養護実習のコアカリキュラムは作成されていないが, 教育実習(学校体験活動)の目標である, 子どもの実態の理解やそれを踏まえた教育活動の特色の理解などは養護実習の目標と共通すると考えられ, 参考にすることができる。また日本教育大学協会全国養護部門研究委員会から, 2006年に提案された養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラム¹⁰⁻¹²⁾(以下2006養護コアカリとする)では臨地実習つまり養護実習における実施研究の項目として, 子どもの理解とかかわり, 学校教育の理解と参加, 養護活動の方法の理解と実施体験, 養護実践の研究の4項目において目標を設定している。今回の調査で得られた学生の学びの要素とこれらと照らし合わせながら, 養護実習における学生の学びについて考察する。

本調査で「子どもの発達・成長の個人差」, 「場面による子どもの変化」, 「健康と生活や地域との関連」などの【子ども観・健康観の広がり】が学びの要素としてあげられた。学生は子どもの健康実態が生活に密接に関係していることや成長・発達には個人差があることなど, 子どもの実態を様々な角度から学んでいた。さらに, 【養護教諭の職務・役割の理解】として【協働・連携の必要性と養護教諭の役割】、【保健室から学校全体への養護教諭の職務の広がり】を学んでおり, 学校組織の中での協働・連携の必要性と組織の中での養護教諭の役割を理解していた。さらに, 学生は【養護教諭の教育的立場の理解】、【子どもに対する多様な対応方法の理解】、【子どもの発達段階を踏まえた対応の気付き】を学んでいた。【子ども観・健康観の広が

り】は2017コアカリ³⁾、2006養護コアカリ¹⁰⁻¹³⁾において、【養護教諭の職務・役割の理解】は2006養護コアカリ¹⁰⁻¹³⁾において、実習の目的として示されている項目である。さらに、我々が養護教諭養成大学を対象に行った調査¹⁴⁾では、養護教諭の役割や職務の理解や養護教諭の実践能力や技術の習得を実習目標として示した割合が高かった。今回の学びの要素として抽出された【子ども観・健康観の広がり】【養護教諭の職務・役割の理解】はこれらに対応する項目であり、学生はこれらの実習目標を修得していることが示された。

しかしながらいくつか課題も示された。2017コアカリ³⁾ 2006養護コアカリ¹⁰⁻¹³⁾において、実習の目標とされている学校経営方針や特色ある教育活動の理解に関する内容が、今回の調査では学生の語りから抽出されなかった。養護教諭は学校保健の視点で学校全体をみることが求められる立場である⁶⁾。学生は学校全体の教育活動の理解が不十分であることが推察され、養成側は学校教育全体を見る視点を目標に位置づけ、学生に意識させる必要がある。また、養護実習は教育実習と同時期に実施されることがある。学生は他の教育実習生と交流の中で【養護教諭の職務に対する認知度の低さ】も感じていた。子どもたちの課題に対応するためには教員が組織的に協働・連携することが求められる⁴⁾⁵⁾ 教諭と養護教諭では子どもを見る視点が違う¹⁵⁾ ためお互いの職務や役割を理解する¹⁶⁾ ことが求められる。事前事後指導を含めた実習において、実習生同士を交流させるなど、お互いの理解をすすめるための工夫が必要であろう。

一方で、本調査では【思考力を重視した指導】、【多様な指導方法】、【教え・教えられる存在】、【様々な教員観の存在】など【教員観・指導観の深まり】のサブカテゴリーが多くあげられた。これらは、2006養護コアカリ¹⁰⁻¹³⁾において目標としてあげられていない項目である。養護実習において、学生は教室の授業を参観したり、給食指導をしたり、学級活動で保健指導を実施したりと指導養護教諭だけでなく、担任や教科担任に指導を受ける機会もある¹⁷⁾。学生はそれらの体験を通して様々な教員観や指導観があることを学んでいた。さらに学生は、担任の子どもへの対応や子どもの反応を観察することで、【場面による子どもの変化】、【できない存在からできる存在の着眼点の変化】、【子どものエネルギーの強さ・可能性の大きさ】などの【子ども観・健康観の広がり】を得ていることも推察される。指導養護教諭は1人職であることが多く、受け入れ体制や学生指導に不安や困難を感じていること¹⁸⁾¹⁹⁾が

報告されている。よって今回、指導養護教諭以外の教諭からも学生が多く学びを得ていることが示されたことは、他の教諭からの指導も含めたより広い教育実習の観点で養護実習を捉えることにもつながり、実習体制を考える上で意義がある。

さらに、学生は【養護教諭になるための自己の強みと課題の発見】を得ていた。2017コアカリ³⁾ 2006養護コアカリ¹⁰⁻¹³⁾においても実習体験の自己評価と自己省察が目標にあげられており、実習を通じて養護教諭になるための課題を自覚することは重要である。しかしながら、学生は養護教諭になるための課題のみならず【やり遂げたことによる達成感と自信】や【コミュニケーションの重要性と必要性】、【コミュニケーションスキルの習得】、【話す度胸とスキルの習得】、【やるべきことの整理と優先順位】などの【社会人としての態度】を学んでいた。近年、大学では自分らしい生き方や自らの個性を発揮できる環境を実現するための教育が求められている²⁰⁾。大学はキャリア教育の推進を求められ、社会人・職業人として自立していくための基盤や能力や態度を育成することが課題²¹⁾となっている。インターンシップへの参加や満足が、職業レディネスや進路選択に対する自己効力感に促進的な影響を与えていることが報告され²¹⁾、学生は【やり遂げたことによる達成感と自信】や【養護教諭への志向性の強化】を得ていたことから、養護実習が進路選択への指針を得る機会ともなっていると見える。これらのことから、養護実習は、学生にとって、養護教諭の育成の機会のみならず、キャリア教育としての役割を果たしていることが示唆された。今後は、養護実習におけるキャリア教育としての機能を考慮して、養護教諭養成の目標達成のみならず、社会人としての態度や職業選択への指針を意識した養護実習を企画することも望まれる。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究は、調査の対象が5名程に留まっているため、本結果をもって養護実習における学生の学びの要素を全て抽出したとは言えない。また、対象者によって実習の形態や学校種、実習校の規模が異なっていたため、養成系別や実習状況による学びの要素が異なることも推察される。今回の結果を踏まえて、さらに対象数を増やし、学びに関連する要因についても検討していく必要がある。

6. 結論

本研究の目的は、養護実習における学生の学びの要素を抽出することである。学生は養護実習を通じて、【子ども観・健康観の広がり】、【養護教諭の職務・役割の理解】を得ていたことから、養護実習の目標である、養護教諭の職務を理解し、子どもの実態や課題を把握して組織で対応することを修得していた。さらに実習を通じて指導養護教諭以外の教諭との関わりから【教員観・指導観の深まり】を得ており、他の教諭からの指導も含めたより広い観点で養護実習を捉える可能性が示された。さらに【社会人としての態度】、【自己理解と課題発見】の学びを通して、今後の大学生活や進路選択への指針を得ていた。

付記

本研究は、平成25～27年度科学研究費基盤研究(C)「養護教諭の専門性を目指した養護実習の体系的プログラムの開発」(研究代表者: 齋藤千景)の一貫として共同で遂行、執筆された研究成果の一部である。

文献

- 1) 教育職員免許法: 昭和24年5月31日 法律第百四十七号 (最終改正平成29年5月30日法律第四十一号)
- 2) 大谷尚子, 中桐佐智子: 養護実習ハンドブック, 東山書房, 京都, 2012
- 3) 教職課程コアカリキュラム: 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, H29.11.17
- 4) 中央教育審議会: 子どもの心身の健康を守り, 安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について (答申), H20.1.17
- 5) 中央教育審議会: チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申), H27.12.21
- 6) 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援—養護教諭の役割を中心として—: 文部科学省, H29.3
- 7) 盛昭子, 堀内久美子, 大谷尚子ほか: 養護実習のあり方に関する研究第2報—学生の実習直後の自己評価—, 日本養護教諭教育学会誌1, 24-35, 1998
- 8) 石原昌江, 野村梨香: 岡山大学における養護実習の現状と課題, 岡山大学教育実践総合センター紀要1, 89-98, 2001
- 9) 三森寧子, 竹鼻ゆかり, 矢野潔子ほか: 養護教諭養成大学における「養護概説」開講の現状, 学校保健研究59, 40-47, 2017
- 10) 日本教育大学協会全国養護部門研究委員会: 養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラムの提案, 2004年, 11月
- 11) 日本養護教諭養成大学協議会委員会報告書: 日本養護教諭養成大学協議会, 7-18, 2008
- 12) 日本教育大学協会全国養護部門研究委員会: 養護教諭養成におけるカリキュラム改革の提言 (2), 2012年, 11月
- 13) 日本教育大学協会全国養護部門研究委員会: 養護教諭養成におけるカリキュラム改革の提言 (3), 2015年, 3月
- 14) 齋藤千景, 竹鼻ゆかり, 朝倉隆司ほか: 養護教諭養成大学における養護実習の現状と課題, 学校保健研究58, 75-83, 2016
- 15) 教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引き: 文部科学省, H23.8
- 16) 五島浩一, 学校現場の視点から捉えた養護実習の在り方, 日本養護教諭教育学会誌19, 7-12, 2015
- 17) 齊藤ふくみ, 宮腰由紀子, 津島ひろ江: 3大学の養護記録実習記録の内容分析による学生の学びの比較—テキストマインニング手法を用いて—, 学校保健研究49, 127-143, 2007
- 18) 大谷尚子, 中桐佐智子: 全国養護教諭養成機関における養護実習の運営について—現状と今後の検討すべき課題について—, 学校保健研究36, 567-577, 1994
- 19) 石井康子, 泊祐子, 西田倫子: 養護実習における養護教諭の指導の現状と教育上の課題, 岐阜県立看護大紀要10, 3-9, 2010
- 20) 中央教育審議会: 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方 (答申) H23.1.31
- 21) 高良美樹, 金城亮: インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として—琉球大学法文学部紀要8, 39-57, 2001